

先週私たちは、パウロが、アケドニヤとアカヤ（今のギリシャ）に行った後、再びアケドニヤのピリピに戻り、そこから船出してトロアスへ渡り、さらには陸路と船を使ってエペソの近くまで旅をしたことを見ました。トロアスでは、その兄弟たちとの別れの前夜、パウロは明け方まで話を続けたわけですが、その際に、窓の所に腰をかけていた青年ユテコが眠ってしまい、三階から落ちて死んでしまうのです。けれども、パウロが抱きかかえた後、ユテコが生き返ったので、人々は大いに慰められてパウロと別れました。

その後、パウロたちは旅を続けますが、急いでいたこともあって、エペソには寄らず、ミレトという町まで行きます。そこからエペソに使いを送り、教会の長老たちを呼ぶのです。彼らに最後の別れを告げるためでした。今日の箇所（31節）から、パウロの前回のエペソ滞在が、三年（31節）であったことがわかりますが、そこでの宣教も、それまで同様、決して容易なものではありませんでした。パウロ自身が言っているように、彼は、謙遜の限りを尽くし、涙をもって、試練に耐えつつ、主に仕えたのです。そして、そのことを教会の長老たちもよく知っていた、といいます。

なぜパウロは、そのようにして主に仕えたのでしょうか？彼はなぜ、益になることは、少しもためらわずに、長老たちに知らせ、また教えをすることで、すべての人に、神様に対する悔い改めと、主イエスに対する信仰とを主張したのでしょうか？長老たちに、三年もの間、神様のご計画の全体を、余すところなく知らせ、夜も昼も涙とともに彼らひとりひとりを訓戒し続けたのは、なぜですか？パウロが、その両手をもって、彼自身のためにも、またともにいる人々のためにも働き、労苦して弱い者を助けなければいけないこと、また「受けるよりも与えるほうが幸いである」という主のみことばを思い出すべきことを、すべてのことにつけて、長老たちに示したのは何のためだったのでしょうか？

それは、その労苦の報いとして、エペソの人々から何かを受け取るためですか？人々から見返りを求める、といった下心から、彼はそのような歩みをしたのですか？それはパウロ自身が、神様の恵みの福音にあずかるため、もっと言うと、主から御国を継ぐためです。また彼自身だけでなく、教会の長老たちを含む、すべて彼を通して福音を聞き、主を信じる人たちが、みな御国を受け継ぐためです。そのために、パウロは自分の身に何度も危険が迫る中でも、それに耐え、また涙とともに主に仕えた。実に、御国を受け継ぐためです。

主イエスはおっしゃいました。ルカ 12:32 「小さな群れよ。恐れることはない。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです」。求める者に御国を与えること、それが父なる神様のみこころです。御子イエスが人となってこの世に来られたのも、その身をもって苦しみに耐え、十字架にかかり、贖いの死を遂げて下さったのも、私たちに御国を与えて下さるためです。そのようにして、主が御国を与えることを望み、また実際に、彼を信じる者が、その信仰によって御国を継ぐことができるようにして下さったので、私たちはそれを受け継ぐことができます。

何事においても、もし与える人がなければ、受けることはできません。みな受けることしか考えていなければ、誰も受けることはできないのです。だれかが与えなくてははいけません。パウロは、主が「受けるよりも与えるほうが幸いである」といわれたと言いますが、最初に与える人となったのは、与えることを幸いだとされたのは、主イエスです。私たちではありません。私たちに御国を継がせるため、主がご自身を与えて下さったので、私たちは、それを恵み（ギフト）として受け取ることができるのです。

32節 「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです」。パウロが言うように、みことばは、私たちが育成し、救いにあずかった者たちの中にあつて御国を継がせることができます。なぜかわかりますか？みことばを通して、私たちは主イエスとその十字架の意味を知るからです。主が、ご自身の血をもって罪と滅びの中から私たちが贖い出して下さったこと、それを信じる者を神の子どもとして新しく生まれさせることで、永遠のいのちを与え、ご自分とともに天の御国を継がせてくれることを、私たちは主の恵みのみことばを通して知るのでした。

ですから、パウロは、みことばを語り続けました。試練があり、涙があっても、ユダヤ人にもギリシャ人にも、恵みのみことばを教え続けたのです。彼自身と、彼を通して主の福音を聞くすべての人が、神への悔い改めと、主への信仰によって御国を継ぐ者とされるためです。

では、どうですか？パウロは「御国を継ぐためにみことばを語り続けた。言葉だけでなく、その生き方のすべてを通して、福音をあかした」というと、もしそのような生き方（歩み）がなければ、御国を継ぐことはできない、と考える人もおられると思います。つまり、「主のため、福音宣教のために労苦しないと救われない」と、生き方を救いの条件のように受け止める人もいると思うのです。そういうところから、信仰ではなく、自分の行い・生き方を見て、「私は天国に入れるかわかりません」という人も実際におられます。

でも、この点で誤解しないようにしたいのです。私たちがみことばを語るのは、つまり、主の福音をあかしするのは、救われているからできることです。まず主から救いを受けているので、私たちは、その良い知らせを他の人にも分け与えることができます。ですから、それは御国を継ぐための条件ではなく、主への信仰によって救われた人が、その救いの証拠（結果）として、そのような恵みの歩みへと向かうのです。いつも言うことですが、主とその救いのすばらしさを知ると、証せずにはおられなくなるからです。ただ、それがまだ完成していないゆえに、私たちは最後まで、この救いの君から目を離さないように気をつける必要があります。

24 節「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません」。これが主イエスに対するパウロの信仰です。「主のためなら、私はいのちを捨てる」と言うのです。いかにパウロが、主のすばらしさ、その恵みの大きさを知っていたかがよく伝わってきます。

皆さん、いかがですか？ 私たちも「信仰」という言葉をよく口にすると思いますが、あなたの信仰は、どのようなものですか？ ことばだけでなく、生き方を通して主の福音をあかししていたパウロの信仰を、主に信頼したものだと言うなら、あなたは、どれくらい主に信頼していますか？ あなたのために、血を流し、いのちをも捨てて下さった主なる神様に、あなたはどれくらいささげることができるのでしょうか？ 今現在、あなたは主に何をささげていますか？ また、主が愛される人々のために、あなたは何を与えておられるのでしょうか？

22-23 節「いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです」。このように言うことで、パウロはエペソの長老たちに、彼らと顔を合わせるのがこれで最後であると告げるわけですが、その別れは、この時、声をあげて泣いた長老たちはもちろんのこと、パウロにとってもつらかったと思います。そこでの労苦が大きかった分、そうと言えるでしょう。

パウロはそこで何を頼りにしましたか？ もう一度、32 節を見ます。「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです」。パウロは、長老たちを、神様とその恵みのみことばとにゆだねる、といいます。なぜなら、彼は自分が去った後、狂暴な狼が、群れの中に入ってくることを知っていたからです。また群れの中から、つまり、長老たちの中からも、いろんな曲がったことを語ることで、人々を主ではなく、自分のほうに引き込もうとする者たちがいることを知っていたからです。それゆえに、パウロは、長老たちを神様とその恵みのみことばとにゆだねました。

そして、彼ら自身に対してはこう命じたのです。28 節「自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです」。長老たち（聖書では、牧師や監督と同じ意義）は、神様がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊によって群れの監督に立てられた人々、というところからして、その役割は非常に重要で、その責任はとても重いものといえます。ですから、神の教会を牧するにあたり、彼らこそ神様とその恵みのみことばとにゆだねられる必要があったといえるのです。

この「ゆだねる」とは、「側に置く」と訳すことのできる言葉が使われています。ですから、長老たちは、パウロによって神様とその恵みのみことばのすぐ側に置かれた、と理解できます。それが、ゆだねられたということです。彼らが主と主のことばによって育成されることで、群れを牧し、人々に御国を継がせるためです。

では、どうですか？ そのように長老たちが、主と主のみことばの側にいたら、群れ全体も自動的に主とみことばの側にいるようになりますか？ そこにはゆだねられた者たちの責任、つまり、群れに属するひとりひとりもまた主と主の恵みのみことばの側に意図的に自分自身を置く必要があるのではないのでしょうか？ それがあつての恵みのみことばによる育成と、御国を継ぐことは実現すると思うのです。いかがですか？ 今日、あなたと主との関係、その恵みのみことばとの距離はどうですか？ それはあなたのすぐ側にありますか？

主イエスの福音は、良い知らせです。実に恵みに満ちています。でも、そうでありながら、それをあかしすること、またそれを心の奥深くにまで受け入れることは容易でないことが事実です。なぜですか？ 私たちのうちに、神様よりも自分自身を、主のことばよりも自分自身のことばを優先しようとする自己中心な思い、つまり、罪があるからです。そして、その罪が、私たちに与えるのではなく、受けることをより幸いなことだと思わせるのです。それがこの世の現実であり、私たち自身もその霊の葛藤のただ中にいます。

でもだからこそ、主イエスは、聖霊を通して私たちとともにおられるのです。主は、遠く離れておられるのではなく、ご自分を信じる者とすぐ近くにおられます。どれくらい近くですか？ 私たちのただ中にです。なぜ主は、そこまで近くにおられるのですか？ 内側から力と助けを与えることで、私たちがいつ、いかなる時にも、主の恵みの福音にあずかり、それを人々にもあかしすることができるためです。ですから、パウロのように、私たちもこの世の歩みにおいて苦しみ、悲しみの中を通ります。涙することも避けられません。でも、慰めと恵みに満ちた主は、そのような困難さえも用いて、私たちをさらにご自分へと近づけて下さるのです。そのようにして、御国を継ぐことが、私たちのうちで救いの望みとなっていくためです。

私たちは、主イエスではありません。またパウロでもありません。教会の長老は、ここでは私だけです。でも、主の愛を受けている人、その恵みの福音にあずかっている人はみな、このすばらしい主をあかしする務めを主から受けています。それは神の子どもとされた者だけにゆだねられた特権です。その恵みを知る者だけが走ることのできるレースです。主に信頼し、自分自身をいつも恵みのみことばの側に置くことで、最後まで主に仕えようではありませんか。終わりの日、主ご自身によって、その信仰（信頼）を認められる者に、主は御国を継がせて下さるのです。